

難しくしよう！

刈谷市立双葉幼稚園（愛知県刈谷市）

【5歳児】

目標に向けて考えたり試したりしながら友達と一緒に遊ぶ5歳児の実践

T = 保育者

[事例1]「難しくしよう！」 6月18日

天窓に円盤を通して遊んでいた子どもたちが円盤を通す的を作ることになった。新聞紙を丸めて棒を作り太さを決めたり、形を決めたりすることになり、「どれくらいの太さにする？」「ちょっと太くてもいいよ どんな形にしよう」「丸は？」「四角がいいよ、三角は狭くなるから難しそうだよ」と考えを言い合う。「三角にしよう！」と決まる。三角を作り、みんなに当たらない廊下の天井からつるすことになった。

T「どれくらいの高さがいいかな？」

M児「低い方が難しいんじゃない？」

T「低い方が難しいの？」

M児「だって飛ばすと、いつも上の方へ飛んでいくよ」

T「そっか、いつもみんなと飛ばすと上の方に飛んでいくもんね。低くしてみる？とつるす高さを見合いながら決める。

早速飛ばし始めたが的を意識しすぎて2歩程度下がった場所から飛ばし、的に入ることを楽しんでいた。S児「先生近くでやったらみんな入るよ、すぐ入って面白くない」と言う。

Y児「これくらいにしよう」と提案し、6歩下がった所にした。Y児「みんなばらばらのところから入っている」という言葉から「テープを付けよう」ということになった。そして、ここから入ったら100点ということになる。また、K児の「四角の的を付けよう。そして、四角の真ん中に棒を入れて難しくしよう」という意見から的が変化した。「入った場所で点数を付けよう！」「一番上が一番難しいから一番高い点」ということになり下から順番に10点～40点まで決まる。



考察 遠くに飛ばすことを楽しんでいた姿からの的をめがけて楽しむ姿になってきた。近くから飛ばすとつまらないと、難易度を高めるためにテープを付けて目印を付けようとする姿、難しい所だから点数を高くしようという子どもからの考えが出てきた。子どもたちの思いを受け止めて確認していくことにより、作って遊ぶ円盤が工夫しながら楽しむ遊びとなるような考えが出てきた。このように、幼児が考えを出しやすい言葉かけ、考えさせるような言葉かけは、友達と考えを出しながら遊びを作り出す面白さを味わわせたり、遊びを楽しむくしたりするために幼児なりの考えを出していくのに大切な働きかけだと分かった。

[事例2]「どうやってやるとうまく当たるのかな？」 6月21日

S児が金曜日に作った空き箱やゼリーカップなどをつなげた的を持ってきて「これを円盤の的にしたら面白くない？」と提案する。T「いいね！今までは通す的だったけど、今度は当てる的だね。いい考え！」と受け入れ天井からつるす。

T「どうやったらうまく当たるかな？」と投げかける。

S児「割り箸はこれくらいで円盤はこれくらいの高さにするといいよ！」と自分の考えを言う。

T「そっか、これくらい割り箸を円盤より高くするといいのね。先生少ししゃがんでとばしてみようかな」と口に出しながらしゃがみ、円盤を飛ばす。

T「しゃがむとやっぱり下の方に飛んでいく」とつぶやく。

S児、K児も同じようにしゃがんで飛ばし始める。

S児「こうやって座ったらもっと低く飛んでいくかもね」と自分なりに試す。「ほら、やっぱり座った方がうまく飛ぶ！」と分かったことを言う。

T「本当！低く飛んでいったね」と声を掛けているとC児もまねをして飛ばす。しかし、ゴムから円盤が離れない。「どうしてCちゃんの円盤前に飛んでいかないのかな？」と投げかける。

S児「ここが切れているからだよ。ここまで切っちゃった方がいいじゃない？」と今までに分かったことを伝える。

T「そうだね、ここまで切込みが入っているから輪ゴムが引っかかって円盤が飛ばないかもね」とS児の言ったことを説明する。

C児は受け入れて切りに行く。その後飛ばすと前に飛んだ。

T「Sさんの言った通りやっぱり引っかかっていたんだね」と声を掛けるとS児は嬉しそうにうなずく。



考察 保育者や友達の言った言葉に耳を傾けたりいいところを取り入れたりする姿が多く見られるようになる。また遊びの中でつかみとったことを「こうするといいよ」と伝えたり試したりする姿がある。保育者が幼児の考えたり試したりする姿を「やっぱり が言ったようにこうするとよく飛ぶね」「 くんみたいに飛ばすと低く飛ぶんだね」と、幼児の考えや行動を言葉に出して認めることで、他児に目が向き、気付いたり考えるための刺激となることが分かった。

[事例3] 「分かった！切ってあるところが小さいからよく飛ばないんだ！」

6月29日

S児、J児、Y児、H児、A児、T児、M児が園庭にある山へ円盤を飛ばしに行く。

戸外へ行く前に「どれがよく飛ぶかな？」と保育者が投げかけると、今まで色々な材質で飛ばしてきた経験からJ児「軽いから厚紙がよく飛ぶよ」と言いながら丸い厚紙を持っていく。他の幼児たちも同じように丸い厚紙を持っていく。

山に着くとそれぞれ思い思いに飛ばす。

T「S君の円盤よく飛ぶね！どうやって飛ばしているの？」と投げかける。

S児「割り箸をあんまり上にすると、高く飛んじゃうから円盤より少し上くらいがいいんだよ」と言い、実際に飛ばすところを見せる。保育者もまねをし「本当だ。S君くらいの高さにするとよく飛ぶね」と認める。J児、A児、T児もまねをする。

Y児は「割り箸は下の方を持ってぎゅーってするといいんだよ」と言う。繰り返し飛ばしていると、H児が「あんまり遠くまで飛ばない」と言う。T「何でかな？」と一緒に考える。保育者の円盤と見比べ、少しすると「分かった！切ってある所が小さいからよく飛ばないんだ！」と円盤の切り込みの大きさが違うことに気付く。

H児「もう少し大きい方がよく飛ぶ」と言う。T「じゃあ少し切ってもう一度飛ばしてみようか」と提案する。H児「そうする」と言い、はさみで少し切る。M児も横で見ながら「それくらいでいいんじゃない」と言う。出来上がり、一度飛ばしてみる。するとさっきより遠くへ飛ぶ。H児「たくさん飛んだ！」と嬉しそうに保育者に言う。T「やっぱりさっきの切り込みは小さかったんだね」と声を掛けると、H児「やっぱり思った通りだった」と得意気に飛ばす。

A児が「うまく飛ばない」と言ってくる。保育者は円盤を見ながら「どこがみんなと違うのかな？」と投げかける。隣で聞いていたH児が「切ってあるところが四角だからじゃない？」と言う。T「本当だ。みんなのは三角だけど、Aちゃんのは四角だね。だから飛ばないのかな」とつぶやく。M児も「きっとそうだよ。」と言う。H児「三角に切ってみたら？でもあんまり切りすぎても飛ばないよ」と自分が分かったことを伝える。はさみで三角に切って飛ばしてみる。A児「飛んだ！」T「Hちゃん、Mちゃんの言った通り三角にしたら飛んだね」と声を掛けると嬉しそうに何度も繰り返し飛ばすことを楽しんでいた。



考察・自分なりに素材や形を選んで、遠くまで飛ばすことを楽しんでいる幼児に対して、保育者が のように言葉を掛けた。すると自分なりに考えたことを保育者に伝えてきた。実際に幼児の考えを言葉で認めるだけでなく、保育者もまねしてやってみることで、周りの幼児も友達の考えに耳を傾け、取り入れてやってみようとするきっかけになるということが分かった。

・幼児が遊びの中でつまづいた時に、保育者が のように幼児と一緒にどうしてか考えた。このことで幼児なりにこれがいけないのかなと考え、試す姿が見られた。保育者がすぐに答えを言うのではなく、一緒にどうしてかなと考えていくことが幼児にとって自分で考え工夫する姿につながり大切だということが分かった。

・幼児が自分なりにどうしたらよく飛ぶのか考え、工夫したり試したりしたときに「本当だね」とただ認めるのではなく、 や のように具体的に幼児の言った言葉を使って認めていくことで、幼児が考え試したことが幼児にとって納得のいくものとなり、学びにつながっていくということが分かった。

みどころ

5歳児は具体的な目的や遊びのイメージをもって、思いを実現しようと進んで取り組みます。この事例のように、実際に進める中で「もっと面白くしたい！」という思いから「もっと難しくしたい」という発想や活動の展開が生じることもあります。子どもが思いや考え、イメージを具体的にもち、実現できるように考えや工夫を出し合って進める中で、「科学する心」が育まれることが分かります。